

藤田正勝著『若きヘーゲル』（まえがき 二頁。目次 四頁。本文 二五三頁。人名・事項索引、文献 一八頁。創文社、昭和六十一年刊。）

早瀬 明

本書は、一九八二年三月、西ドイツ・ポーフム大学、哲学・教育学・心理学部に提出され、其の後 Hegel-Studien, Beiheft 26 として公刊された学位論文、„Philosophie und Religion beim jungen Hegel. Unter besonderer Berücksichtigung seiner Auseinandersetzung mit Schelling“ の日本語版である。然し、著者も断つて居る如く、ドイツ語版とは必ずしも同一ではない。帰国後に於ける研究成果が反映されて居るからである。

本書は、其の成立経過から既に明らかな如く、ポーフム大学に付置のヘーゲル・アルヒーフに於ける最新のヘーゲル研究、特に、その文献学的研究に基礎付けられた極めて高水準のヘーゲル研究書である。

本書の対象は、一七八八年から一八〇一年に至る所謂「若き

ヘーゲル」の思想である。著者は、この時期の思想を、近年の文献学的な成果に依拠しつつ、発展的な観点から叙述せんとする。其の際、特にシェリングとの影響関係を極めて綿密に解明し得た点に於て、本書は、国際的視野から見ても、現代のヘーゲル研究に貢献するところが大きい、と思われる。以下、其の内容を紹介する。

先ず、本書に於ける著者の根本的意図は次の点に存する。即ち、「イエーナ時代に展開された新しい思想をそれ以前の思索との連関において考察すること」。そして、其の考察が論証せんとする所は、次のような一つのテーゼとして提出された、即ち、「(イエーナ時代初期の)ヘーゲルのこの(シェリングに対して)独自の、自立した思想形成の基盤はシェリングと再会する以前に、とりわけフランクフルト時代の倦むことのない思索のうちに形づくられていた」というテーゼとして。(括弧内は書評子の添加。)此のテーゼの論証に向けて、本文は三部に構成されている、而も、明確な戦略的自覚の許に。即ち、著者は、考察全体の着手点を、一八〇〇年十一月二日付けのシェリング宛書簡の「青年時代の理想は反省形式に、同時に一つの体系に変化せざるを得なかつた」と云う言葉に置く。そして、其処に含まれた三つの契機、即ち「青年時代の理想」、「反省形式への変化」そして「反省形式」の相互連関に即して全体を構成する。即ち、「青年時代の理想」と云う言葉で意味されて居た事柄を明白な形で指し示す事を課題とする第一部、此の思索の中から「反省形式への変化」が結果せざるを得なかつた「必然

性」の解明を課題とする第二部、そして、青年時代の思索が「反省形式」の中にどの様に結晶して行ったのか、そしてそれがイェーナ時代のヘーゲルの思索の独自性とどの様に関わって居るのかの解明を課題とする第三部と。以下、具体的内容を順次紹介する。

一

先ず、「青年時代の理想」の解明を課題とする第一部は、「主観性の復権」と題される。そして、其のもとに、一七八八年から一七九六年に至る間のヘーゲルの思想が理解される。

「青年時代の理想」は「理想の宗教」である。これが、此処での考察全体を通して示された著者の見解である。そして、其れに関し、次の事が明らかにされる、即ち、其の「理想の宗教」は、一方で、少くともベルン時代迄は一貫して、主観性を根本原理とする「主観的宗教」として構想された事、然し他方で、其の内容理解に関し、テュービンゲン時代とベルン時代とは変化が見い出される事。そして、其の変化は、次の様なものであるとされる。即ち、前者に於て主観性の原理は、後期啓蒙主義に於ける情感主義の影響の下に、「頭脳と心胸」の調和として理解されたのに対して、後者に於ては、後期啓蒙主義的理解から離脱し、カントの実践哲学の立場からする理解へと転換するに至った。

——そして、カントの立場からする「理想の宗教」の構想の成立に関しては、以下の三点が明らかにされる。(一)伝統的宗教

の批判的考察が、従つて其の不定性の問題が関心の対象と成った時、ヘーゲルの裡で、「主観的宗教」の諸原則を従前以上に鮮明に提示する必要が生じたのであり、其の事からカント実践哲学の「成果」への注目が帰結した。(二)ベルン時代に成立せる所謂『イエスの生涯』は、斯様なカントの立場から理解されたイエスの生涯が、国民教育的な関心のもとに叙述されたものである。(三)次いで成立せる所謂『キリスト教の不定性』に於ける実定宗教の批判は、カントの『宗教論』に於ける制度的宗教の批判を前提してはじめて理解し得る。——

所で、ベルン時代からフランクフルト時代に至る過渡期に於いて、最も顕著な出来事の一つは、斯様なカントの立場からの離脱であるが、著者は、一章を設けて、斯様な転換を準備したとされる「シェリングのカント批判との出会い」に就いて考察し、次の事を明らかにしている。即ち、ヘーゲルは、ベルン時代の後期に於ける・シェリングとの書簡交換及び其の著作を通して、シェリングがスピノザ主義の立場より為していた・カント的な道徳的神概念の批判を次第に受け容れ、それによってカントの実践哲学に対して批判的に成つて行ったが、然し、それでも尚、シェリングのスピノザ主義に対しては距離を置いて居たのである。

次いで、「反省形式への変化」の「必然性」の解明を課題とする第二部は、「哲学と宗教」と題される。そして、其のもとに、一七九七年から一八〇〇年に至るヘーゲルの思想が理解される。

此処では、先の「必然性」の所在を求めて、「理想の宗教」を新たな立場より基礎付ける事から出発した・フランクフルト時代のヘーゲルが、其の末期に「形而上学」の可能性を意識するに至る迄の過程が、「生」の概念を基軸として詳細に追跡される。先ず、ヘーゲルが「生」の概念を漸く獲得するに至った所謂『キリスト教の精神と其の運命』迄の思想的発展に就て次の事が明らかにされる。即ち、フランクフルトに於てヘーゲルは、ヘルダーリンの思想との出会いを契機として、ベルン時代に於ける・感性に対する理性の優位を原理とするカント的「主観的宗教」の枠を越えて、自由と自然、或は主観と客観の絶対的統一の裡に「神的なもの」の所在を見い出さんとする合一哲学の立場に立ち、そこから、新たな「理想の宗教」即ち「美しき宗教」を構想せんとするに至った、そして、斯様な構想の途上に於て、其の根本原理として、対立の中で自らを形成し其の事を通して自らの内容を獲得するような全体が、即ち「無限なるもの」としての「生」の概念が成立を見、其れを基礎として一個の統一的な思想が生成を開始するに至ったのである。

次いで、ヘーゲルが此の「生」の概念を「根本的に、かつ組織的に展開することを企図したように見える」所謂『一八〇〇年の「体系」断片』に就て次の事が明らかにされる。即ち、一七九七年から九八年に成立したシュリングの自然哲学的著作に刺激されて、ヘーゲルは反省的思维的制限性を自覚しつつも「生」を反省言語に由つて把握し表現せんと試み、此処で初めて「哲学」がヘーゲルの思索に於ける位置付けを獲得するに至るが、

然し、反省の制限性の故に、それは理性に由り廃棄されねばならず、従つて、哲学は、反省を越えた所で成立する宗教へ移行しなければならぬ、とされた。そして、宗教の本来的対象とされた「真に無限なもの」としての「生」は、悟性の定立する対立を、単に排除するのではなく寧ろ其れ自身の裡に内包する全体、即ち「結合と非結合の結合」として理解された。

最後に、ヘーゲルが「形而上学」の可能性に就て示唆するに至った所謂『キリスト教の実定性』改稿に就て次の事が明らかにされる。即ち、「生」を巡る思索を通じて獲得された・有限者と無限者との連関に就ての理解に基づき、実定性の新たな規定が成立した事、更に、此処で初めて、其の連関が、即ち「生」の理解の可能性が、宗教と「平行して」「形而上学」にも認められるにいたった事。

「反省形式」の中に結晶した思索の内容と其の独自性の解明を課題とする・最後の第三部は、「反省と思弁」と題される。そして、其のもとに、一八〇一年、即ち所謂「差異」論文に於けるヘーゲルの思想が理解される。

此処では、フランクフルト時代の末に至り漸く生じて来た・学への「内的」要求が、イェーナに於けるシュリングとの議論を通じて一個の体系的思想として展開されて行く過程が追跡されている、そしてフランクフルト時代以来の有限者と無限者との関係の理解、従つて真の無限性の理解を巡るヘーゲル固有の思想的文脈が、特に反省の問題に焦点を当てて、明るみに齎されている。其の際、主要な論点は二つある。即ち、(一)シュリング

の同一哲学に対しイェーナ時代初期のヘーゲルが全面的に依存する、と主張する・ハイム (R. Haym) 以来の通説 (現代ではハルトマン W. Hartkopf 及びコンデリス P. Kondylis に由り代表される) を論駁する意図のもとに、一八〇〇年初めの『超越論的觀念論の体系』以降に於ける同一哲学成立の過程が極めて精密に追跡され、其の結果、一八〇〇年末迄の時点で未だ同一哲学が成立して居ない事、其の成立は、一八〇一年以降、即ち「スピノザの決定的な影響」の許に『私の哲学体系の叙述』(一八〇一年五月刊) が成立して以後に属する事、而も、其処に於ける絶対者の理解は、「有限性の位置付けの問題」を尙未解決の儘残して居た事 (此の問題に關するヘーゲルの影響が示唆されて居る) などが明らかにされる。

以上の点を基礎として、(一)一八〇一年の『差異』論文に於て「常に彼(ヘーゲル)の思索の中心にあった」(括弧内は書評子)とされる思弁的哲学の、その構想の成立に對して、シェリングとの議論の有する意味が、フランクフルト時代に於けるヘーゲルの思想との連関に於て考察される、其の結果、『差異』論文に於てヘーゲルは、思弁的哲学の構想の基礎付けを、単にシェリングの立場からフィヒテ哲学と対決する事を通して行なっただけではなく、同時に、フランクフルト時代以来の独自の思索に基づくシェリング哲学批判を通して遂行せんとしていた事が明らかにされる。然し、此の点は、本書に於て最も核心的な部分に属すると考えられるが故に、改めて其の内容を少し詳しく紹介する。

二

此処 (第三部第二章) に於ける著者の意図は、「シェリングとの議論から得られたものを確定すると同時に、ヘーゲルの思想の独自性を明瞭な形で取り出し、それをヘーゲル自身の思想展開というコンテクストのなかで理解すること」にある。叙述には聊か未整理な所も有るが、此処では、叙述の順序に従って節毎に其の主要な論点を紹介して行く。

「哲学の必要」——此処では、『差異』論文に於て「哲学の必要の源泉」とされた「分離」の概念のその基礎に有る絶対者理解が、『私の哲学体系の叙述』に於けるシェリングの其れとの比較に於て考察される。先ず、絶対者認識に關し、絶対者の認識であると同時に其の自己認識でもあると云う・理性の新しい理解が、『差異』論文に於て初めて、シェリングの影響の許に成立したことが確認された後で、両者に於ける絶対者理解が、「現象」の問題に即して比較される。両者の絶対者理解に於ける決定的な相違が、此の「現象」の理解の裡に有るとされるからである。即ち、「シェリングによれば (現象) は」自体的には存在せず、ただ絶対的同一性の外においてのみ可能であるにすぎない (括弧内は書評子) のに對して、「ヘーゲルは「現象」を絶対者そのものあり様として、あるいは絶対者それ自身の本質に属するものとして理解する。」換言すれば、ヘーゲルの絶対者にとって「現象」は本質的契機であるのに對して、シェリングの其れにとっては単なる「假象」であるに過ぎない

のである。

では、斯様な相違は何に由来するか？ 著者は其れを、シェリングとの再会以前、フランクフルト時代に展開された・「生」を巡る思想の裡に求める。著者が着目するのは、『一八〇〇年の断片』に於ける無限性の理解である。即ち、其処では、「反省諸規定によってとらえられる対立の世界もまた無限な生の本質的な部分を構成している、というのがヘーゲルの理解であった。」著者に抛れば、斯様な「生」理解の裡に既に、シェリングとは独立な絶対者理解が、即ち対立乃至現象の世界を其の本質的契機とするような絶対者の理解が準備されて居たと云う。斯くて、著者は、「ここにはつきりとフランクフルト時代の思索とイエーナ時代の思索を貫く一つの連続性をみてとることが出来る」、即ちシェリングに対して独自の固有のコンテクストがフランクフルト時代からイエーナ時代にかけての・ヘーゲルの思想的発展を貫いて居る、と結論するのである。

「反省と直観の総合としての思弁」——此処では、『差異』論文に於ける・絶対者の学的認識に対する理解が、『私の哲学体系の叙述』に於ける・シェリングの其れとは本質的に異なり、其の基礎をフランクフルト時代の思想の裡に有する事が明らかにされる。先ず、絶対者の学的認識の主張に於て兩者は一致する事が確認される。次いで、其れにも拘らず、兩者に於ける其の理解は本質的に異なる事が示される。即ち、シェリングが、絶対者に対しては、反省的思惟から端的に区別された「直覚的な認識」のみが可能であるとすると対し、ヘーゲルは、一方

で「孤立した反省」の制約を認める点ではシェリングと一致するにも拘らず、他方では「理性としての反省」、即ち「思弁」による絶対者認識の可能性を承認して「反省を通しての絶対者の構成」を主張する点において区別されるのである。

著者は更に、ヘーゲルの「思弁」理解が二側面より為されて居るとして、夫々の基礎を明らかにし、以てヘーゲルの「思弁」概念が彼独自の思索の上に成立して居る事を示さんとする。先ず、「否定的な側面」、即ち「悟性をして、自己自身による・その真理性の否定へと向かわしめる」と云う側面に就いて、この側面が、『一八〇〇年の断片』に於ける・「無限な生への宗教的高揚に先立つ導入的な段階」として構想された「理性による反省規定の廃棄」の・イエーナに於ける発展として理解し得る事が明らかにされている。(更にこれは、初期イエーナ体系構想に於ける「論理学」の理解へと結び付く、とされる。)次いで、肯定的な側面、即ち「制約されたものを絶対者へと関係づけ、この連関のなかでそれを把握する」と云う側面に就て、『差異』論文に於て斯様な「思弁」の本質的形式と見做されたアンティノミーが、『私の哲学体系の叙述』に於ける・A II 2とA II 2と云う二命題の連関の理解よりは寧ろ、フランクフルト時代の所謂「信と有」に於けるアンティノミー理解を基礎として居る事が明らかにされる。著者は最後に、ヘーゲルの斯様な「思弁」概念が、シェリングの『大学における学問研究の方法について』(一八〇三年)に一定の影響を与えて居る事も指摘して居る。

「同一性と非同一次性の同一性」——此処では、『差異』論文に於けるヘーゲルの・絶対者の構造の理解が、『私の哲学体系の叙述』に於けるシェリングの其れと比較され、両者間に存する決定的な相違と、其の起源とが明らかにされるが、それと共に、有名な「同一性と非同一次性の同一性」と云う規定の含意するシェリング批判が示唆され、其のシェリングに対する影響が明らかにされる。

先づ、ヘーゲルに於ける「(絶対者の)客観的全体性」(括弧内は書評子)の概念とシェリングに於ける「万有」の概念との比較を通じて、両者に於ける・絶対者乃至絶対的同一性と「区別と差別を含む有限なもの」との關係の理解の本質的相違が明らかにされる。即ち、「個々のあるもの、有限なものは、シェリングにおいてあくまで絶対的同一性の外においてのみ可能なものとして考えられて」居るのに対して、ヘーゲルに於ては、「(絶対者は)現象を否定するのではなく、それを同一性へと構成しなければならぬ」のであって、絶対者は、「自己自身を有限なものの中に形態化する全体、あるいは現象する全体」として理解されて居る。

次いで、『差異』論文には斯様な絶対者理解よりするシェリング批判が感ぜられて居る事が指摘される、即ち先づ「絶対的同一性を根本原理としながら、しかしそれを徹底して有限なものとの対比においてとらえる立場」即ち「熱狂」の立場に対する批判に就いて、次いで「同一性と非同一次性の同一性」と云う絶対者の根本規定に就いて指摘される。就中後者に関し、著者

はそれが、シェリングに於ける・「同一性の同一性」と云う絶対者の規定を念頭に置いたものであり、其の批判の目的の為に斯様な表現が選択せられたのであるとする。更に、斯様な「同一性と非同一次性の同一性」と云う絶対者把握が、『一八〇〇年の断片』に於ける・「結合と非結合の結合」と云う「生」の理解の裡に其の基礎を有する・ヘーゲル独自のものである事が明らかにされる。

そして最後に、著者は、『差異』論文に於ける絶対者理解がシェリングに与えた影響、即ち「シェリングのヘーゲルへの接近」に就て以下の事を明らかにする。即ち、先ず對話篇『ブルーノ』(一八〇二年)に於てシェリングが、ヘーゲルの見解を容れて、絶対者を単なる同一性としてではなく「統一と対立の統一」として規定するに至り、それ故、又「無限なもの有限なものへの移行」を初めて問題とするに至ったこと、次いで、然し其れにも拘らず、「シェリングにとって、有限者の絶対者からの分離はあくまで有限者がそれ自身に對する時に成立する事態であり、絶対者それ自身にとつての事態ではない」と云う点で、両者の絶対者理解には尙埋め尽くし得ない「決定的な間隙」が残存し続けたこと、を明らかにしている。

三

以下に於ては、簡単に、本書に對する若干の私見を述べ、書評としての責任を果たし度い。先ず何よりも、本書は、ヘーゲル・アルヒーフを中心として推進せられて来たヘーゲル研究

の一九八三年迄の成果を略々完全に消化し、其の成果の上に立って、特にシェリングとの交渉に重点を置きつつ、其れを更に發展させたものとして、極めて高い研究水準に在るものと判断される。其の叙述は極めて緻密にして且つ平明であり、同時に其の高度の客観性は、深い説得性を有して居る。それ故又、その高度の学術性にも拘らず、本書が、専門的研究者は勿論、更には、これから青年時代及びイエーナ時代のヘーゲルを研究せんとする者にとつても、極めて良い案内役と成り得るのであらう事は疑い得ない。特に初学者は、本書を通して、現代のヘーゲル研究が獲得し得たもの何たるかを具さに見る事が出来るであらう。然し他方、学問研究が絶えざる批判を通して弁証法的に發展し行く可きものと見做される限り、このような本書に対しても書評子は厳正なる批判の眼を以て臨まざるをえない。それ故、以下、評者の見出した問題点を挙げる。

最初に見た如く、本書は、三つの主要問題を柱として構成されて居る。それ故、此處で我々が先ず問う可きは、此等の問題が、本書の叙述を通して、果たして有効に回答せられ得たかどうかである。(実は、著者に拠れば、この三つの問題は、第四の問題関心、即ち「ヘーゲル」によって問題にされたものの体系的な理解という関心」に由り支えられて居た、と云う。然し、此の点に就ては、本書に於て未だ充分には展開せられて居ず、寧ろ来たる可き統篇を俟たねばならないと考えられるが故に、此處では考察の外に置く。)

先ず第一の問題、即ち「青年時代の理想」の何たるか、に就

て。——著者は本書に於て、ヘーゲルの云う「青年時代の理想」を、確かに一応、政治的なもの、或はヘーゲルの国民教育的関心にも顧慮を払っているとは云え、根本的には、「理想の宗教」と等置して理解して居る。然し、評者の私見に拠れば、ヘーゲルが「青年時代の理想」のもとに理解して居たものは、其れが例えば「神の國」とか、或は「見えざる教会」と云つた宗教的表象を纏っていたとしても、其の根本に於て、フランス革命の経験に由つて規定された・本質的に政治的なものでもあつた様に思われる。即ち、フランス革命、そしてカント哲学によつてドイツの若き知識人達に課せられていた・ドイツ人の国民生活全体の根本的変革(——其れは、統一的国民国家の建設と云う優れて政治的な課題を、本質的契機として居たと信ぜられる——)、つまりドイツ革命の遂行と云う課題を、ヘーゲルも、其の思索の全体を以て追求して居たと信ぜられるのである。それ故、ヘーゲルの宗教理解は、ドイツ革命に対する斯様な根本的関心よりして位置付けられ意味付けられねばならない、と云うのが評者の見解である。其の意味で、本書に於ける・「青年時代の理想」の解釈は、其の思想的背景に対する豊富な言及にも拘らず、少くとも評者にとつては、なお隔靴搔痒の感を免れない。即ち、其處にはヘーゲルの政治的思惟がもつ本質的意味に対する顧慮が不足して居る、と云うのが評者の結論である。

次いで第二の問題、即ち「反省形式への変換」の「必然性」の所在に就て。——上述の事からの必然的帰結として、フランスフルト時代に於ける(ラシュエタット会議を中心とする)政治

的経験がヘーゲルに対して有する意義が見失われており、それ故に、恐らくは其処から帰結したのであろうが、ヘーゲルの思想的変化への内面的理解がやや希薄な様に思われる。と云うのも、評者の見解では、ヘーゲルをして、フランクフルト時代の末に其の最終的立場を「宗教」から「哲学」へと変更するに至らした根本のものは、斯様な具体的歴史経験、或は寧ろその歴史の意味を見い出さんとする彼の思想的努力であると信ぜられるからである。そして、其れを説明する為には、恐らく、ヘーゲルと直接間接に交渉のあった若き思想家達の思想的情熱の掘り起こしも必要と成るのであろう。

確かに著者も、最近二〇年間程の研究動向を反映して、ヘルダーリンとの交渉に少なからぬ意義を認めては居るが、然し上述した如く、彼等の思索全体を根本的に規定して居た政治的歴史的状况に対する顧慮が不十分であるために、ドイツを襲った苛酷な政治的運命の只中で彼等が互いの意見を真剣に闘わせ乍らドイツ革命を可能ならしむ可き精神革命の原理を探究して行った思想的苦闘が、従って恐らくは其処から産み出されて来たであろう・ヘルダーリンの、そして何よりもヘーゲルの上述した如き思想的発展が、其の基底から問われることがない儘に終っている様に思われる。

更に具体的に云えば、先ず、確かに「反省形式への変化」に於てシェリングの多大な影響が存したのであろう事は、著者が本書に於て詳しく解明し得た所であり、其の点に著者の研究の優れた意義が認められる可きであらうが、然し、この「必然性」

の所在を解明せんとするのであれば、シェリングの影響を論ずる以前に、何故に「宗教」が超えられねばならなかったのか？（——これは、著者が提出した問題の裡に当然含まれて然る可き問いであった——）が主題的に解明せらる可きであつたのではないか。其処からはじめて、シェリングの影響の有する内面的意味も一層良く明らかにされ得たと信ぜられるのである。そして、評者の見解では、其の点の解明は、上述の如き歴史経験と其の意味を巡る思索を度外視しては不可能である。

次いで、ヘーゲルをして「哲学」乃至「形而上学」の可能性を承認するに至らしめた「必然性」（著者に於て主として念頭に置かれて居たのは此の問題である）も、未だ其の内面的理解が得られては居ない様に思われる。確かに著者も認めて居る如く、此の点に関するシェリングの影響は、ヘーゲルの思索に於て既に「内面から要求」されていた事柄を前提として初めて論じ得るものであるが、然し、肝腎の「ヘーゲルの思索が内面から要求した事柄」に就ての著者の解明は未だ、事実関係の提示からそれ程遠く出ては居らず、従つてその事実関係を貫き通して居るヘーゲルの内的意欲の所在を突き止めるには至つて居ない様に思われる。唯、少くとも評者の推測する所では、其の点を突き止める為には、特にフランクフルト時代末期に於けるヘーゲルの、反省への理解に関する徹底的な解明が是非とも必要であると思われるが、其れは現在尚、文献学的にも、依然として極めて困難な課題のままであると思われる。然し、既に最近のヤンメ（G. Janme）氏等の業績も示唆して居る如く、斯

様な一見純粹に理論的な問題に際しても、其の根底に、若き思想家達に於ける・具体的な歴史的現実との・絶えざる思想的格闘が存在していた事は確かであると信ぜられるのである。斯くて、自己自身の歴史的現実との・ヘーゲルの思想的対決を主題的に問わない場合、「反省形式への変化」の「必然性」の解明は、其の最も核心的な部分において、数多くの未解明のものを残さざるをえないのではないか、之が評者の結論である。

最後に第三の問題、即ち「反省形式」の中に結晶した思索の内容と其の独自性の解明に就て。——此の点に関しては、少くとも事実関係に関する限り、評者は、著者の見解を根本的に支持するものである。少くとも我々が現時点に於て入手可能な・ヘーゲル及びシェリングの全集乃至関連資料に基づく限り、著者の解明し得た事柄は一般に承認さる可きものであると信ぜられる。

以上、本書を構成する三つの主要問題に即して、評者の見解の一端を明らかにしたが、此の批評が何らかの学問的対話の発端と成らん事を切に願いつつ擲筆したい。(了)

(筆者 はやせ・あきら 京都大学文学部〔西洋近世哲学史〕
 研修員)

前 号 目 次

普通概念としての多様体……………	澤 口 昭 肆
「相互作用論」のモデル序説(完)……………	宝 月 誠
事物の類似たるイデア……………	長 倉 久 子
——ボナヴェントゥラのイデア論に おける問題——	
デカルトにおける自然学の形而上 学的基礎づけ……………	小 林 道 夫
——伝統的存在論との対比において——	
〔資料〕 西田幾多郎・全集未収載遺稿(二)	
〔学界展望〕 西田哲学をめぐる……………	大 橋 良 介
最近の論点	
——書評を兼ねて——	
〔書評〕 岩波哲男『ヘーゲル宗教……………	氷 見 潔
哲学の研究——ヘーゲル とキリスト教』	